

シオン大通りの時代とエドワード・ルイス・ウォーレント

秋田大学 村上 東

エドワード・ルイス・ウォーレントはしばしばナサニエル・ウェストと比較される。ともにユダヤ系アメリカ人で、四篇の小説を残し、これからの活躍を期待されつつも、三十歳代で他界。こうした経歴上の類似のみならず、ふたりの作品には明らかに共通するところがある。

ふたりはそれぞれ、自分が哀れんでいるとも知らず、ひとびとが壁を築く際に使う悲しみに満ちた品々を哀れんだ。古いバイオリンの光沢を持つ木目、チューバとトランペットのへこんだ真鍮、カメラの曲がったレンズ、千を数える不用品が放つ金色、銀色の目配せ、それらは質屋とその見習いに光を投げかけ、仕事の指針と店に留まる理由を与えた。それゆえふたりはますます複雑な存在となっていくが、その光は類を見ない神秘的なものだったのだ。 (ウォーレント、『質屋』110-111)

気がついてみるとロンリーハート女史は質屋の店先にいた。毛皮のコート、ダイヤの指輪、時計、猟銃、釣り道具、マンドリンなどが所狭しと並べられている。これらはすべて苦痛を背負った品々。贈答品であったナイフの刃先で苦悶したまばゆい光が身を振っている。へこんだトランペットが苦痛の音を漏らした。

(ウェスト、『ロンリーハート女史』93)

ウォーレントもウェストも、質草に残された品物がかつてそれらを所持したひとびとの不幸や苦悩を物語っていることに着目し、象徴として使っているのである。ふたりのニューヨーク作家が庶民のつましい暮らし、語られることの少ない彼らの不幸に目を向けていることを示している。また、ロンリーハート女史の人生相談欄に不幸や苦痛への処方箋を求めて投書をする様々な読者も、ウォーレント第三作『ムーンブルームの店子たち』で主人公に不平不満をぶちまけるぼろアパートの住人たちと実によく似ている。しかし、ふたりの類似点はここまでである。

ユダヤ系アメリカ文学が、無視し難い現象となり、大きな流れを形作ってゆくのは1950年代後半以降の話であり、ウェストが四篇の小説を発表した1930年代には、ユダヤ系の文学者はいても、のちに私たちがユダヤ系アメリカ文学と考える潮流は生まれていなかった。『アメリカのユダヤ系作家たち』のアレン・グットマンは、ウェストを取

りあげない理由を、彼の作品がユダヤ人の合州国への「同化の過程と、その結果生ずる主体性の危機を、意味を持たせて扱っているのでもない」と説明している（邦訳 18）。ウェストが親につけてもらった名前はネイサン・ウォーレンスタイン・ワインスタインという実にユダヤ人的なものであったが、大人になってからユダヤ系らしからぬナサニエル・ウェストと正式に名前を変えている。ユダヤ人差別や合州国への同化の問題が彼の実人生にあったとしても、ウェストはそれらを作品に取り込むことがなかった。四篇の小説に登場する主人公は皆アングロ＝サクソン系プロテスタントとおぼしき人物である。そして、彼の作風を手短に表わすとしたら、メルヴィル、後期マーク・トウエインからジョン・バース、ジョン・ホークスに至るブラック・ユーモアの系列に属するものである。レスリー・フィードラーは、1950年代後半から花開くユダヤ系アメリカ文学ルネッサンスを「大通りとしてのシオン」と呼んだが、ウェストの文学活動は、シオンという大通りが開通する遥か以前に、いきなり合州国文学のメイン・ストリートに越境するものであったといっても大過あるまい。日本文学にたとえるとすれば、在日韓国人、在日朝鮮人が、創氏改名で日本人風の名を名乗り、在日の匂いなど全くない小説を書くというのに近い。ⁱ ウェストにはメイン・ストリートに越境する以外の選択肢は見えていなかったのかも知れない。

今仮に、不幸、悲劇、死、終末論といった笑い難い題材を、距離感を持って突き放し、笑い飛ばそうとするのがブラック・ユーモアであるとすれば、ウェストの作品は、似非インテリに対する風刺である処女作『ボルソ・スネルの夢の生活』以外、この定義にかなっている。ウォーレントの作品においてもユーモアは重要な要素だが、ウェストとは対照的に、共感の笑い、ほほえましいユーモアとなっている。人間的な感情の回復、人生の肯定こそが彼の一貫した主題であったのである。1978年の秋にユダヤ系の詩人のミルトン・ケスラーが来日した際、自作をあと回しにしてデイヴィッド・イグナトーの暖かい人生賛歌と呼ぶべき作品群ⁱⁱを朗々と読みあげ、褒めちぎり、ユダヤ系アメリカ文学の勉強をするのであれば、こうしたところに着目して欲しいと力説していたことが強く私の印象に残っているが、ウォーレントの小説にはイグナトーの散文版と呼び得る要素が色濃く出ている。ウォーレントは、大通りとしてのシオンが最も賑やかだった時代に活躍し、ユダヤ系アメリカ文学を代表するとはいえないまでも、ひとつの典型と呼んで差し支えない作品を残している。

ユダヤ系アメリカ文学の認知、言い換えれば、レスリー・フィードラーが「大通りとしてのシオン」と呼んだ現象を異なった面から取り上げている論考として、フィリップ・ロスの「新しいユダヤ人のステレオタイプ」にも私は触れておきたい。この論考でロスはふたつの新しいステレオタイプを分析し批判を加えているが、その第一は、レオン・ユーリスの小説に基く1960年公開の映画『栄光への脱出』にまつわるものである。

イスラエル建国に向けて奮闘するユダヤ人を主人公とするアドベンチャー物で、原作者ユーリスは戦士としてのユダヤ人像を提示したことに鼻高々だったそうである。これに対してロスは、強制収容所体験のみならず建国以前のイスラエルでテロ活動に従事したこともある作家で、自らを正当化できぬままイギリス人将校の処刑を余儀なくされた模様を描くイーライ・ウィーゼルの『夜明け』を例にとり、戦士というユダヤ人像が孕む倫理的問題を指摘する。ロスの批判は当然であろう。合州国の映像に出てくる日本人がすべて赤穂の四十七士と神風特攻隊であつたら、自分が受けるであろう誤解に絶句する日本人は少なくない。

しかし、ユダヤ人が銀幕の英雄になるのにはそれなりの訳がある。イギリスが中東から手を引いた後、ユダヤ国家建設を目指すシオニズム運動の後ろ盾となったのは合州国である。ソ連との協調を図り、1947年11月にはパレスティナ分割決議を国連総会で採択させ、翌58年5月にイスラエルは独立する。多大な犠牲が出たあととは申せ、ホロコストを止めたのも合州国、そしてイスラエルを独立させたのも合州国。ならば、(その後の中東政策に深刻な問題があるにせよ)『栄光への脱出』は、兄合州国の助力、弟イスラエルの活躍の物語といえよう。

おまけに、50年代後半から60年代にかけての時代は、民族自決という理念が多くの開発途上国の独立という形で世界情勢に反映され、日本でも万国旗が小中学校の必需品となり、子供たちが国連事務総長になる夢を抱く時代でもある。言い換えれば、少数民族の独立、奮闘、冒険が社会の関心を呼び、巨額の富を生む人気商品となる可能性があった。また、合州国国内に目を転じれば、正に人種統合、公民権運動の時代である。そのなかで、少数民族といっても受け入れられ易い準白人であるユダヤ人(おまけにイスラム教徒ではない)を主人公とした冒険物語が大ヒットすることも時代の為せるわざといえよう。そして、日系のジェイムズ・繁田(『クリムゾン・キモノ』1959年公開)やアフリカ系のシドニー・ポワティエ(『招かざる客』、『夜の大捜査線』ともに1967年公開)といった少数民族出身の俳優が映画界で活躍する御時世となり、テレビでカッコイイとはいえないユダヤ系のダスティン・ホフマン(『卒業』1967年公開、『小さな巨人』1970年公開)が登場し、ジョン・ウェインに代表されるアメリカ男性神話を銀幕から後退させてゆくのである。ユダヤ系アメリカ文学が認知されてゆく時代は、同時に、ユダヤ系商品が売れてゆく時代であり、フィードラーの「大通りとしてのシオン」やロスの「新しいユダヤ人のステレオタイプ」は、受け入れられることで新たに生ずる諸問題を指摘する論考として重要であるといえよう。(質はともあれ)それまで無視できるほどの量だったステレオタイプが異常増殖し、恐ろしい変貌をも遂げる時代に、ステレオタイプ化される側は分析と批判を投げ返し、必要とあらば自己の再定義を行わなければならない。このような時代に刊行されたソール・ベロー、フィリップ・ロス、バーナード・

マラマッド、ウォーレント等の作品は、ステレオタイプ化に応え、ユダヤ系アメリカ人というものを新たに定義する試みとなっている。

ロスが危惧するもうひとつのステレオタイプを代表する存在はハリー・ゴールデンの描くユダヤ人像である。彼は、『アメリカにおいてのみ』(1958)ⁱⁱⁱなどのエッセイ集で、彼が生まれ育ったニューヨーク、ローワー・イースト・サイドの移民街とそこで営まれる(家族)生活をユーモアとたっぷりの感傷を交えて描き、そこから巣立ったユダヤ系市民の成功物語をてんこ盛りにして大ベスト・セラー作家となった。椅子にゆっくりと座ることのない家事労働中毒の母や、その愛に応えガリ勉をして医者になるしかない息子などが出てくる。暖かく強い家族の絆、深い両親の愛といった日本人を含む非ユダヤ系の人間が抱く幻想・偏見・ステレオタイプはその後も消えることなく、私事で申しわけないが、ある私の友人は「僕は両親の愛を知らない。ユダヤ人に生まれたかった。この言い方が非ユダヤ人の偏見だとは判っていても、他に言い方を知らない。日本人に生まれれば良かった、とでも言えばいいのか」と私に話した。恐らくこの時代に流布し、定着してしまった偏見が助長したものであろうか。^{iv} ゴールデンの描くユダヤ人像に対し、ロスは、

確かに今日、ユダヤ人が情にもろいという考えには魅力があろう。黒人のところへ行ってリズムの話をするほど馬鹿ではない連中が、私のところにやって来て「暖かみ」の話に私を巻き込むのである。連中はそれがお世辞で、しかも、真実だと思っているのだ。(15)

と切り返し、自分が創作科で教えた学生の作文を例示しながら、問題が複雑であり、表面的なステレオタイプ化が間違っていることを明らかにしてゆく。そして、ホロコスト以降、広島への原爆投下以降の世界に生きるユダヤ系作家の倫理的使命は他にある、と結論付けている。

ここでもロスの指摘は正しく、私には反論などない。しかし、60年代から現在まで私たち日本人は正にその〈暖かみ〉を求めてユダヤ系アメリカ文学に接してきたのではなかったか。トミー・ウィルヘルム(ソール・ベロウ、『その日をつかめ』の主人公)が、迷い込んだ葬式で体験する涙の洗礼にほろりとさせられた私たち、「ひとはすべてユダヤ人」という言葉通り、成長をとげ克己ののちにユダヤ教徒となったフランク・アルパイン(バーナード・マラマッド、『アシスタント』の主人公)に拍手を送った私たち、再び人生を全身で抱きしめられるようになる主人公を描くウォーレント作品に感動した他ならぬこの私も、〈暖かみ〉、〈人間臭さ〉、〈生の肯定〉といった標語で表されるところにユダヤ系アメリカ文学の魅力を感じてきたのである。ジャズやロックにみ

られる打楽器の多用、ポリリズムに象徴されるリズムの豊かさがアフリカ大陸から新大陸にもたらされたことは事実、だが、アフリカ系アメリカ人は皆音楽家と言えばステレオタイプとなろう。暖かみや生の肯定がユダヤ系文学を特徴付けるもののひとつであり、非ユダヤ系読者にとっての魅力であるという事実も、ステレオタイプ化¹⁾や民族差別は警戒せねばならないにせよ、頭ごなしには否定できないのではなかろうか。私たち日本人のなかには、茶の湯の世界に見られる身分制度や贅沢文化を嫌悪するあまり、茶の湯に魅せられる外国人までも良く思わない人間がいるが、あの伝統の核心にあるものまで否定し去ることは、日本人のアイデンティティの問題に関わってしまうのではなかろうか。私は、ウォーレントの示したかったユダヤ性を傷つけることなく、その暖かみ（暖かみが駄目ならば、ロスが言うように「炎」あるいは「葛藤」と言い換えよう）を論じられれば、と切に願う。

アーヴィング・マリーンも彼の『ユダヤ人とアメリカ人』の序文で、ユーリスやゴールデンに触れつつ、ユダヤ性、ユダヤ教の問題に入っている。

私たちは、神が死んだ、と主張する。ユダヤ人にとっても非ユダヤ人にとっても同様に不明瞭で自己欺瞞的であろうが、ますます高まるユダヤ性への関心は、恐らく、私たちは神を待っている、という無意識の欲求に起因するものであろう。私たちがゴールデンのあまりに感傷的な逸話を楽しむ時、私たちは低俗な宗教を受け入れているに過ぎない。ハシディズムについての本を読みつつも信仰心を持たなければ、それもまた罪深いのである。（中略）[現在アメリカで活躍するユダヤ系作家]は、ユダヤ教正統派の信仰から逃れ、父祖たちの神に反逆しているゆえに「偽りの」ユダヤ人共同体に属している。しかし、彼等は皮肉な形で父祖たちを映し出す鏡となっている。

（45）

神の言葉である律法書に万事従うのが本来ユダヤ教徒の生き方である。それならば、黒い服を脱ぐことも、共同体の外に活路を求めることも、肉系、牛乳系と分けていた食事作法をやめることも、全て神の問題、神との問題となろう。マリーンがゴールデンを非難するのは、神との（葛藤の）問題を棚上げにしてユダヤ人（の過去）を美化するからに他ならない。私がまずウォーレントのデビュー作『人間の季節』を取り上げるのは、ウォーレントが正面から神の問題を扱い、マリーンの言う「皮肉な形」かも知れないが、いささか新しい答えを提示しているからである。

主人公、ジョーゼフ・パーマンはロシア生まれのユダヤ系移民である。コネティカット州ニューヘイヴンで配管工をしている。美男でもなく学歴もないユダヤ系移民である彼にとって、キリスト教徒のアメリカ人メアリ（おまけに彼にとってみれば知的な金髪

の美人である)と結婚できたことは奇跡に近い大勝利であった。以来、息子の戦死などに見舞われたものの、絵に描いたように幸福な結婚生活を送ってきた。仕事も安定し、マイ・ホームを構え、三人の子供にも恵まれている。その彼が59歳で愛妻に先立たれる。父が女房依存症であることを承知の娘夫婦は、同居を提案するが、パーマンは、新生活に踏み出せないばかりか、神を罵りつつ、人間関係を悪化させ、ひとり夢のなかで回想に沈潜する。作品は、ロシアでの少年時代まで遡る回想と、ひと夏(1956年6月から9月のことである)続くパーマンの哀れな男やもめ暮らしが交互に提示される形で進み、宗教的体験を経て神と人生とを再び受け入れ、彼が娘夫婦の家に引っ越すまでを描く。

回想は、彼の人生に起こった重要な事件を新しいものから古いものへと戻りつつ描いてゆくが、合州国における新生活と(東欧の)ユダヤ人が守ってきた宗教的伝統の両方を肯定するものとなっている。言い換えれば、主人公パーマンが双方に帰属することを確認してゆくのである。まず、妻メアリは彼と合州国との幸福な関係を象徴している。結婚までの経緯がほほえましい。彼女は、「美しい恋物語を自分の使命と考える」美人で、羽振りのいい大学生の注目を集めている。パーマンはといえば、あらゆる点でカッコよさは無縁のブルーカラー。デートをしても不釣合い甚だしい。ほぼ勝ち目のない勝負を承知で高価なプレゼントを連発する「貢くん」状態である。1924年9月、ある晩のダンス・パーティーで、彼女のその気ありげな表情を誤解したプリンストン大学のフットボール選手がメア리를芝生に押し倒す。瞬時にセク・ハラ男を撃退し、パーマンは彼女の心を捕らえ、婚約にこぎつけるのである。逆転ホームランに他ならない。

その後の幸せな結婚生活もさるところながら、凶事までもが主人公の合州国への帰属を謳いあげている。1945年4月息子マーヴィンの戦死公報が彼のもとに届く。この事件は、彼が、間接的とは申せ、第二の祖国に関わった民主主義を守る戦争に貢献したことを物語っている。また、1916年12月(パーマン19歳である)、配管工事中にパーマンに対して差別発言を繰り返したアイルランド系の現場監督と乱闘、善戦空しく気絶し、病院に担ぎ込まれる。指を失い、三日間意識不明の重症。しかし、爽快感のみが残り、パーマンは合州国に生きるユダヤ人としての誇りと自負を確立する。

渡米以前に目を転ずると、10歳頃の挿話から移民船内での出来事まで六回の回想が織り込まれている。最も古い記憶は、1907年7月、キエフからドルミークの村へ帰る際の景色と家族の様子にまつわるものである。彼を神と結びつけるふたつのもの、つまり、父の大きな存在と、大地と自然を象徴する大河の流れ(水であることが後述の宗教的体験の際に重要となってくる)とが描かれており、パーマンが育む信仰心の原点を示している。1909年4月、父と買い物に出掛けた際、ユダヤ人狩り(ポグロム)に遭遇する。鞭を振るう暴徒を父は一撃で倒し、難を逃れ、パーマンは神の存在を実感する。

1912年12月、安息日の夕食直後、父が急死する。うろたえることなく家族に祝福を与え、家父長らしく堂々と息を引き取る様子が描かれている。渡米前の出来事では、父と神の存在が中心となっているが、他の挿話（失敗に終わった初体験、移民船における他人の出産等である）も、生の肯定が彼の信仰にとって重要であることを間接的に物語るものとなっている。回想によってパーマンは自分の人生を生き直し、無意識のうちに自己の信仰の本質を確認してゆく。これは小説のクライマックスである宗教的体験の下準備に他ならない。

パーマンが営んだ結婚後の信仰生活に関する記述をまとめると以下のようなになる。子供が巣立って夫婦ふたりの生活になったこともあり、安息日の儀式は大幅に簡略化している。しかし、やもめ暮らしの主人公を気遣って教区の律法学者が彼を訪ねてくることから、妻に死なれるまで教会（シナゴグ）に通っていたことが判る。1956年4月30日、病院で妻を看取った時、娘に対し「俺は祈った。今までずっと祈ってきた。そしたら、こうじゃないか」と言い、その後の18日間泣き通したそうである。そして、宗教的体験の直前まで神に対する罵倒が続くのだが、（儀式面はともあれ）信仰が篤かった分、反動も大きかったといえよう。悲しみは深く、7月には自殺の予行演習すら試みている。

回想が少年時代に近づくにつれて宗教的体験の起こる条件が整ってゆくのだが、体験そのものは突然やってくる。その晩も彼は「テレビの前に座り、物思いに耽っている」。画面とは関係なく、彼の意識はロシア（恐らく現在のウクライナ）の大地、そこを流れ黒海に注ぐ大河、少年時代の家族生活へと飛んでゆく。ウサギが登場するコマーシャルになったところで映像が途絶え、パーマンは受像機のなかを覗きこむ。やっきになって配線を引き千切り、したたか感電して床に倒れる。その姿勢で声をあげ、神と妻に許しを乞うのである。

今までしゃべってきた英語、ロシア語、イデイッシュ語を混ぜこぜにしながら、彼は祈るとも知らずに祈っていた。自尊心が脳裏をかすめることもなく、自分でこしらえた生き地獄を脱したいと、生の感触を取り戻したいと、懇願した。(171)

絶望と怒りのどん底にいた時には気付かなかったが、生まれて初めて、神は敵でも、裏切り者でも、髭をたくわえた拷問者でもない、と判った。(172)

それでも、神との和解を確信し切ることができなかった彼は、翌日、宗教的体験の深化を求めて海岸へと出掛ける。少年時代の彼にとって大地と自然の生命力を象徴していたものが大河の流れだったわけであり、ニューヘイヴン周辺にミシシッピのような川がないこともあって、その代替物として大西洋を選ぶのは不思議ではない。そして、帰りが

けに土砂降りに遭い、疑念は洗い流される。パーマンは自己を取り戻し、娘夫婦との同居を決意する。

土砂降りの雨をユダヤ教に当てはめて考えると、「喪に服す者が悲嘆の儀式を終える30日目に行う入浴」(Galloway 57)に相当しよう。しかし、複数の研究者が指摘しているよう(例えば Galloway 59)に、キリスト教における洗礼の儀式をまず連想させる点は無視できない。私も、ふたつの理由から、キリスト教の洗礼を連想させる仕掛けであると考え。第一に、イエス・キリスト的な登場人物が受難(『質屋』の場合、受難役はジーザス・オーティースという名の黒人店員である)し、その結果主人公が覚醒するという粗筋をウォーレントが一度ならず用いていることに注目したい。第二に、ユダヤ教の宗教体験というよりもユダヤ系アメリカ人の合州国における宗教体験が描かれている、との読みが可能ながあげられる。

神学者、森孝一は『宗教からよむ「アメリカ」』のなかで、〈合州国の「見えざる国教」〉について詳細な解説を加えている(33-96)。大統領就任演説を締めくくる決り文句「それゆえ、神よ、私を助け給え」における「神」を例にして、彼の解説を要約してみたい。明治政府が国家の一体感を作り上げてゆく際に天皇を利用したことと同様に、様々な移民の寄り合い所帯である合州国には「神」を国家統合の軸として使う必要がある。大統領就任演説の「神」は、ひとつの宗派の神と特定できない。むしろ、ユダヤ教からプロテスタント新興勢力に至るユダヤ＝キリスト教の文脈で漠然とながら「神」と捉えられるものだ解釈するのが妥当であろう、となる。

ウォーレントは、主人公の合州国への帰属を、言い換えれば、彼が合州国市民となって幸せだったことを、様々な形で描きこんでいる。主人公パーマンは、ユダヤ人、ユダヤ教徒である以上に、最早ユダヤ系アメリカ人なのである。従って、彼の宗教的体験がユダヤ教の枠をはみ出し、合州国的な色彩を、つまり「見えざる国教」の色彩を深めていることは、彼のアイデンティティに相応しいといえよう。大統領就任演説の「神」をつくりあげた政治風土が彼の宗教的体験を助けたのである。ナサニエル・ウェストが小説を書いていた30年代には、ここまで明るく肯定的なユダヤ系アメリカ人の自己定義を下すことは遥かに困難であったと考えられる。しかし、1953年にはユダヤ系の青年オーギー・マーチがハックルベリー・フィンに成り代わって合州国を歩き回り、ウォーレントの時代にはシオン大通りを新車で走ることが可能になっていたのである。

合州国に出掛けると、信仰を話題にせざるを得ない場面にたびたび出食わず。政治と宗教をわざと話題にしない場面ももちろんあるが、条件さえ揃えば、信仰ほど盛り上がる話題も他にないくらいである。そして今私は、宗教的体験を肯定的に扱ったアメリカ小説について肯定的な論文を書いている。日本においてはかなり事情が異なる。就職指導の際には、入社試験の面接では宗教の話避けろ、と学生に教えなければならない立

場にあるし、宗教的体験などと大真面目に言えば、オーム真理教徒予備軍と見なされかねない。信仰に対する態度が日米間で大きく異なることは以前から私の関心事である。岡本かの子の「白隠」、三島由紀夫の「海と夕焼け」以来、私は宗教的体験を主題とした日本の小説に巡り合ってこなかったが、信仰を大胆に扱う大江健三郎の近作『宙返り』には注目せざるを得ない。日本人が信仰の問題を考え直すべき時期であることは間違いないだろう。それは、ウォーレントの『人間の季節』やカトリックの信仰をはっきりと示すフラネリー・オコナーの作品を論じる際に一歩踏み込んだ議論や分析をすべきである、という合州国文学に関わる者にとっての宿題を意味しているのかも知れない。

「ウォーレントは宗教色の薄い家庭環境に育ち、自身バー・ミツヴァ（十三回目の誕生日に一番近い土曜に執り行われるユダヤ教の元服式）を受けることもなかったからか、自分の子供たちにはユダヤ教改革派の信仰を持たせようとした」そうである（Galloway 18）。移民第一世代は合州国に順応することに終始し、過去や伝統に立ち戻ろうとするのは第二世代からあとになる、とよく言われるが、第三世代であるウォーレントにはこのことが当てはまる。

ウォーレントにはもう一作ヨーロッパ生まれの人間を主人公にした小説がある。冒頭で引用した彼の第二作『質屋』だが、主人公はホロコストの生き残りである。ホロコストに触れる批評や論説文は数多いが、ユダヤ系アメリカ小説でホロコストを扱ったものは意外に少ない。ペローの『サムラー氏の惑星』、マラムッドの短編「湖の貴婦人」とレイモンド・フェダマンの諸作しか私には思い当たらない。非ユダヤ系を含めても、ウィリアム・スタイロンの問題作『ソフィーの選択』がこの短いリストに加わるくらいであろう。圧倒的な事実の重みゆえに、おいそれとは小説にし難い題材だということであろうか。

主人公ソル・ネイザーマンは、ポーランド、クラコフ大学の教員であった。強制収容所で妻とふたりの子供、友人たちを失う。自身も人体実験に供され、「骨盤の一部と二本の肋骨がなく、鎖骨も奇妙な方向に曲がっている」（37）。戦後パリのユダヤ人団体に働いたあとアメリカに渡り、現在は質屋の雇われ店主である。店の持ち主はアルバート・マリリオという売春宿を経営するヤクザで、質屋は売春の収益を隠すためのトンネル会社として機能している。犯罪の片棒を担ぐことに対する報酬で、ネイザーマンは閑静な住宅街に家を持ち、妹一家と物質的には不自由のない暮らしをしている。しかし、毎年、家族の命日である8月28日が近づいてくると強制収容所の記憶が蘇り、彼を悩ませる。

いかにホロコストの記憶と対峙するか、これが『質屋』の主題である。ポーランドで家族や友人を失ってから現在までの15年間ネイザーマンが取り続けてきた態度／対策は、人間的な感情を捨て去ることであった。

彼には家族の死を悲しむことも悼むこともなかった。自分のなかにある抽象的なものを全て焼灼してしまったからである。現実とは自分の視覚、嗅覚、聴覚のなかにある世界だけである。彼はいかなるものも追悼しない。これが生き残りの秘訣であった。

(91)

15年前の今日彼の心は萎縮した。マンモスと同様、彼は冷凍保存されてきたのだ。(中略) 彼はとうの昔に死んでおり、あとは死体処理を残すのみである。(249)

過去にまつわる感情を抑えつけるのみならず、現在日常生活で接する人間に対してもネイザーマンは冷淡極まりない。しかし、この感情の自殺という対処法が15年目にして効果を失いつつある。その時彼に感情の回復を促す事件が起こる。強盗が店に押し入り、ネイザーマンに発砲する。彼を敬愛する店員の黒人青年ジーザス・オーティースがとっさに彼をかばい、身代わりとなって銃弾を受け、死ぬ。この受難劇の直後から、ひとが変わり、ネイザーマンは死者たちのために涙しつつ、自分の助力を必要としている甥や愛人のために働くことを決意する。

過去との結びつきを重視すること、生の現実を受けとめること、人間的な感情を取り戻すこと、これらは皆ユダヤ系文学の典型的な主題であり、教訓である。しかし、そうした教訓を導き出す筋立てがこの作品ではキリスト教から拝借したものである点に注目せざるを得ない。『人間の季節』と同様に『質屋』も、合州国社会＝文化のなかでユダヤ的なものを謳いあげる試みとなっている。ウォーレントの作品は、ユダヤ的なものを肯定し、ユダヤ系アメリカ人のアイデンティティを新たに定義付けるものであり、シオン大通りの時代に書かれるべくして書かれた、と思われる。しかし、80年代に入ると彼の作品を扱う研究は激減する。『質屋』は映画化されているが、ウォーレント原作といっても通じず、ロッド・スタイガーの主演作といわなければ通じなくなる。ユダヤ系ブームゆえの人気は70年代までである。シオン大通りは最早アメリカ文学の地図になじんだ地名となり、その後はアフリカン・アメリカンの女性作家、アジア系、ネイティヴ・アメリカンの文学者が注目される時代となる。

かつて在日文学といえば、金達寿(キム・タルス)、金石範(キム・ソクポム) <代表作『鴉の死』1967>、李恢成(イ・フェソン) <代表作『砧をうつ女』1972、『約束の土地』1973>といった極めて在日的な主題、題材を持った作家の名前が頭に浮かんだものである。しかし今、鷺沢萌 <代表作『スタイリッシュ・キッズ』1990、『駆ける少年』1992>のように在日色の殆どない作品も多い新世代も活躍している。ユダヤ系アメリカ文学も同様である。ユダヤ色濃厚なシンシア・オージックが健在であると同時に、

生まれがユダヤ系というだけに等しいポール・オースターが日本人の関心をも集めている。こうした多様化の波はまだ広がってゆくであろう。

ウォーレントには他に二篇、『門に立つ子供たち』、『ムーンブルームの店子たち』と題された長篇があるが、ともにアメリカ生まれの若者が主人公であり、今回は触れずに稿を閉じたい。

本稿にある『迷いの季節』と『質屋』の作品論は『記憶のポリティックス』（東京：南雲堂フェニックス、2001）所収の拙稿「旧大陸の記憶とアメリカの今 —エドワード・ルイス・ウォーレントの移民一世物について」と重複している。作品論を中心にと考える編者の要望に応え、この時の寄稿では文学史の考察等を盛りこむことがなかった。本稿はその欠損を補うものである。

-
- i これに対しては異論もあろう。ユーモア、そしてブラック・ユーモアもユダヤ系文学の重要な要素であるし、ウェスト作品には、schlemiel の登場、旧約聖書への言及、ユダヤ人による反ユダヤ的な冗談が見受けられる。しかし、ウェストが極めてアメリカ文学的なブラック・ユーモアの使徒である事実は否定し難い。
 - ii ホームレスに人間の尊厳を見る 1961 年発表の “Say Pardon” などが代表作である。
David Ignatow: Poems 1934-1969. 128-29.
 - iii 『徒然草』よろしく多様な話題を扱い、南部の黒人差別問題にも触れている。その芸達者な構成のなかで外部に対してユダヤ人のステレオタイプを売る形になっている。
 - iv 例えば、次の四コマ漫画はこうしたステレオタイプを利用したものである。Peter Dotta, *The Krautzenbummer Kids in Playboy* (September, 1978), p. 186. 輸出された NHK ドラマ『おしん』や『いのち』（橋田寿賀子脚本）も働き蟻という日本人のステレオタイプ化に貢献しているそうである。
 - v この問題に踏み込むためには、ロスやブルース・ジェイ・フリードマンといったユダヤ人のステレオタイプや自己嫌悪を扱う作家をも論ずる必要があるだろう。

Works Cited

- Fiedler, Leslie A. "Zion as Main Street." *Waiting for the End*. New York: Stein and Day, 1964.
- Galloway, David. *Edward Lewis Wallant*. Boston: Twayne Publishers, 1979.
- Golden, Harry. *Only in America*. Cleveland: World Pub. 1958.
- Guttman, Allen. *The Jewish Writer in America: Assimilation and the Crisis of Identity*. New York: Oxford UP, 1971. 『アメリカのユダヤ系作家たち』東京：研究社、1979.
- Ignatow, David. *David Ignatow: Poems 1934-1969*. Middletown, Connecticut: Wesleyan UP, N.D.
- Malin, Irving. *Jews and Americans*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1965.
- 森孝一 『宗教からよむ「アメリカ」』東京：講談社、1996.
- Roth, Philip. "The New Jewish Stereotypes." *The American Judaism Reader*. London, New York, and Toronto: Abelard-Schuman, 1967.
- Wallant, Edward Lewis. *The Human Season*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1960. Reprinted in "the Library of Modern Jewish Literature" series. Syracuse, New York: Syracuse UP, 1998.
- _____. *The Pawnbroker*. New York and London: Harcourt Brace Jovanovich, 1961.
- West, Nathanael. *Nathanael West: Novels and Other Writings*. New York: The Library of America, 1997.